慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾大学における教育学教育の展開： 1938年学則制定から終戦まで
Sub Title	The development of pedagogy in the curriculum at Keio University: after the educational system reform in 1938 until the war
Author	渡部, 恭子(Watanabe, Kyoko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2010
Jtitle	哲學 No.123 (2010. 3) ,p.361- 376
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this study is to trace the development of pedagogy in the curriculum at Keio University after the educational system reform in 1938 until the war. In the process, it is unavoidable to focus on the point that pedagogy was needed only for teacher training or not. The following situations of pedagogy will give some clues for the question: the position in the literature department, the subjects in the teacher training courses and the contents and teachers of the lectures. In 1938, three faculties and fifteen majors were established again in the literature department after 10 years. Around that time, the lectures of pedagogy were included in the subjects for students who desired to take teacher's licenses without examination. However, the contents of them show a side which had a different context from teacher training. General pedagogy was led by Sumie Kobayashi, and several teachers took turns teaching on the other subjects related with pedagogy. It is conceivable that the lectures of pedagogy at Keio University took a role not only in teacher training.
Notes	特集：教育学の射程 プロジェクト研究論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000123-0361

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

プロジェクト研究論文

慶應義塾大学における教育学教育の展開

――1938年学則制定から終戦まで――

渡　部　恭　子*

The Development of Pedagogy in the Curriculum at Keio University: After the Educational System Reform in 1938 until the War

Kyoko Watanabe

The purpose of this study is to trace the development of pedagogy in the curriculum at Keio University after the educational system reform in 1938 until the war. In the process, it is unavoidable to focus on the point that pedagogy was needed only for teacher training or not. The following situations of pedagogy will give some clues for the question: the position in the literature department, the subjects in the teacher training courses and the contents and teachers of the lectures.

In 1938, three faculties and fifteen majors were established again in the literature department after 10 years. Around that time, the lectures of pedagogy were included in the subjects for students who desired to take teacher's licenses without examination. However, the contents of them show a side which had a different context from teacher training. General pedagogy was led by Sumie Kobayashi, and several teachers took turns teaching on the other subjects related with pedagogy. It is conceivable that the lectures of pedagogy at Keio University took a role not only in teacher training.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻後期博士課程3年

本論文では，慶應義塾における教育学教育の展開を叙述するにあたり，1938（昭和 13）年の学則制定から終戦までの過程を提示する。慶應義塾大学における教育学を主軸とした学科課程は，1918（大正 7）年の「大学令」によって設立され，その後学則改正に伴い幾度も形を変えながら存続し，やがて終戦を迎えるに至った。ここでは，その期間の後半にあたる 10 年余りの動向を明確化していきたい。その際，特に，(1) 文学部における教育学専攻の位置づけ，(2) 教員無試験検定希望者の学修科目の変遷，(3) 教育学教育に関する開講科目の種類および担当者の推移に着目していく．

1.　文学部 3 分科 15 専攻への復帰

1928（昭和 3）年の 15 学科新設から 10 年を経た 1938（昭和 13）年，文学部には再び文学科・哲学科・史学科が設けられ，3 分科 15 専攻の制に復帰することとなった．学則改正の申請書にはその理由として，「学術研究の進歩に伴ひ従来の経験と社会の要求とに鑑み学生研学上の便益並に指導上の改善を必要とし，学部学科課程の整理変更を行」うと記されている[1]．こうして，学科課程は全面的に改正されることとなり，哲学科には 6 専攻（東洋哲学，西洋哲学，心理学，教育学，倫理学，社会学）が設置され，教育学はその一専攻として位置づけられることとなった[2]．

学則第 9 条にある「文学部に於て授業すべき学科目」に掲げられている教育学教育関連の学科目は，「教育学」「教育学史」「教育史」「各科教授論」「教育行政」の 5 つである[3]．この学則において，教育学専攻の必修学科目としては「教育学（概論，特殊及演習五）」「教育学史（一）」「教育史（一）」「各科教授論（一）」「教育行政（一）」が挙げられている．また，東洋哲学・西洋哲学・倫理学・社会学専攻では「教育学（一）」が，心理学専攻では「教育学（概論及特殊二）」が必修学科目に指定されていた．哲学科における選択学科目については，教育学専攻を除く 5 専攻すべてが

表 1.　1938（昭和 13）年学則制定時　文学部各学科の学科目（単位数[5]）
※本稿では，教育学教育に関連する科目のみ抜粋.

a.　文学科

専攻学科	必修学科目	選択学科目
国文学	—	教育学（二）
支那文学	—	—
英吉利文学 独逸文学 仏蘭西文学	—	教育学（二）
芸術学	—	教育学

b.　哲学科

専攻学科	必修学科目	選択学科目
東洋哲学	教育学（一）	教育学，教育学史，教育史，各科教授論
西洋哲学	教育学（一）	教育学，教育学史，教育史，各科教授論
心理学	教育学（概論及特殊二）	教育学，教育学史，教育史，各科教授論，教育行政
教育学	教育学（概論，特殊及演習五），教育学史（一），教育史（一），各科教授論（一），教育行政（一）	—
倫理学	教育学（一）	教育学，教育学史，教育史，各科教授論
社会学	教育学（一）	教育学，教育学史，教育史，各科教授論

c.　史学科

専攻学科	必修学科目	選択学科目
国史学	—	教育学，教育学史，教育史
東洋史学	—	
西洋史学	—	

「教育学」「教育学史」「教育史」「各科教授論」を挙げている（ただし，心理学専攻のみ「教育行政」をも選択学科目に含めている）．なお，文学部の他学科に関しては，文学科では支那文学を除く5専攻すべてが「教育学」を，史学科では3専攻すべてが「教育学」「教育学史」「教育史」を選択学科目として挙げている[4]（表1参照）．

2. 教員無試験検定希望者の学修科目

文学部卒業後に各学校の教員無試験検定を出願する者の学修科目および単位数についても，文学部の3分科15専攻への改正を受けて一部変更が申請された．師範学校・中学校・高等女学校教員希望の者に関しては，1928（昭和3）年制定時からの変更は特にみられない[6]．一方，高等学校高等科教員希望の者に関しては，表2のように変更がなされている[7]．大きな変更点としては，出願に際して学修科目や単位数だけでなく，卒業する学科および専攻をも指定されたことが挙げられるであろう．また，1928（昭和3）年学則制定時に挙げられていた教育学教育に関する科目は，ほとんどが「教育学」であったが，1938（昭和13）年学則制定時には「教育史」が多くみられる．このように「教育学」ではなく「教育史」のみが挙げられている哲学概説・心理及論理・修身については，卒業すべき専攻において「教育学」は既に必修学科目に指定されているため（表1参照），新たに「教育史」を加えたのだと考えられる．

3. 教育学教育の講義内容

教育学に関する学科目の講義内容については，『三田評論』に1934（昭和9）年度分から掲載されている「文学部講義題目表」[8] から窺い知ることができる（表3参照）．なお，表を抜粋する際，旧字体は適宜新字体に改め，仮名遣いは原文のままとした．

この表によると，「教育学」「教育史」「教育学史」といった主たる科目

表 2.　教員無試験検定希望者の学修科目（単位数）

a.　1938（昭和 13）年学則制定時：　師範学校，中学校，高等女学校教員希望の者
※1928（昭和 3）年学則制定時の一覧は，公民科の未設置以外相違点がないため省略.

	学修科目（単位数）	教育学教育に関する科目
修身	倫理学概論（一），倫理学（二）「東洋（一），西洋（一）」，社会学（一），哲学概論（一），支那哲学（二），教育学（二）	教育学（二）
公民科	倫理学（二）「東洋（一），西洋（一）」，憲法（一），行政法（二）「総論（一），各論（一）」，民法（二）「総則（一），親族及相続（一）」，経済原論（一），経済政策（一），社会学（一），社会政策（一）	—
教育	教育学（二），教育学史及教育史（一），各科教授論（一），教育行政（一），心理学（一），哲学概論（一），倫理学（一），社会学，美学，宗教学，西洋哲学史，支那哲学，印度哲学中の（二）	教育学（二），教育学史及教育史（一），各科教授論（一），教育行政（一）
国語，漢文	国語学国文学（八），支那文学支那哲学（五），言語学（一），教育学（二）	教育学（二）
歴史	国史東洋史西洋史史学概論（一四），教育学（二），地理学，人類学，考古学，古文書学，民族心理学，社会学，東洋美術史，西洋美術史，経済史，法制史，教育学史及教育史中の（二）	教育学（二），…教育学史及教育史中の（二）
英語	英吉利語学英吉利文学（八），言語学（一），教育学（二），文学概論，国文学，支那文学，美学，哲学概論，西洋美術史中の（一）	教育学（二）
独語	独逸語学独逸文学（八），言語学（一），教育学（二），文学概論，国文学，支那文学，美学，哲学概論，西洋美術史中の（一）	教育学（二）
仏語	仏蘭西語学仏蘭西文学（八），言語学（一），教育学（二），文学概論，国文学，支那文学，美学，哲学概論，西洋美術史中の（一）	教育学（二）

b.　1928（昭和 3）年学則制定時：　高等学校教員希望の者

	学修科目（単位数）	教育学教育に関する科目
修身	倫理学概論（一），倫理学（四）「東洋（二），西洋（二）」，支那哲学印度哲学（三），西洋哲学西洋哲学史（三），教育学（二），社会学，美学，心理学，宗教学，経済原論中の（二）	教育学（二）
国語	国語学国文学（一〇），支那文学支那哲学（五），教育学（二）	教育学（二）
漢文	支那文学支那哲学（一〇），国語学国文学（五），教育学（二）	教育学（二）
英語	英吉利語学英吉利文学（一二），言語学（一），教育学（二），文学概論，国文学，支那文学，独逸文学，仏蘭西文学，西洋美術史，西洋哲学史中の（二）	教育学（二）
独語	独逸語学独逸文学（一二），言語学（一），教育学（二），文学概論，国文学，支那文学，英吉利文学，仏蘭西文学，西洋美術史，西洋哲学史中の（二）	教育学（二）
仏語	仏蘭西語学仏蘭西文学（一二），言語学（一），教育学（二），文学概論，国文学，支那文学，英吉利文学，独逸文学，西洋美術史，西洋哲学史中の（二）	教育学（二）
日本史及東洋史	国史（四），東洋史（六）〔又は国史（六），東洋史（四）〕，西洋史（二），古文書学（二），史学概論（一），教育学（二），歴史哲学，地理学，人類学，考古学，民族心理学，社会学，東洋美術史，経済史，法制史，教育学史及教育史，国文学，支那文学，支那哲学中の（二）	教育学（二），…教育学史及教育史…中の（二）
西洋史	西洋史（八），国史（二），東洋史（三），史学概論（一），教育学（二），歴史哲学，地理学，人類学，考古学，民族心理学，社会学，西洋美術史，経済史，法制史，教育学史及教育史，西洋哲学史中の（二）	教育学（二），…教育学史及教育史…中の（二）

哲学概説	哲学概論（一），支那哲学印度哲学（三），西洋哲学西洋哲学史（四），心理学（一），倫理学（一），美学（一），認識論又は論理学（一），教育学（二），社会学又は宗教学（一）	教育学（二）
心理及論理	心理学（四），論理学（一），哲学概論（一），認識論（一），西洋哲学西洋哲学史（三），教育学（二），倫理学，社会学，美学，宗教学，支那哲学印度哲学中の（三）	教育学（二）

c.　1938（昭和13）年制定時：　高等学校高等科教員希望の者

	卒業学科・専攻	選択履修科目	教育学教育に関する科目
国語	文学科国文学	教育学（二）	教育学（二）
漢文	文学科支那文学	教育学（二）	教育学（二）
英語	文学科英吉利文学	教育学（二）	教育学（二）
独語	文学科独逸文学	教育学（二）	教育学（二）
仏語	文学科仏蘭西文学	教育学（二）	教育学（二）
哲学概説	哲学科東洋哲学	西洋哲学（一），教育史（一）	教育史（一）
	哲学科西洋哲学	支那哲学（一），印度哲学（一），教育史（一）	教育史（一）
心理及論理	哲学科心理学	—	—
	哲学科教育学	心理学（二），民族心理学（一）	—
	哲学科倫理学	心理学（二），民族心理学（一），教育史（一）	教育史（一）
	哲学科社会学	心理学（二），民族心理学（一），教育史（一）	教育史（一）

修身	哲学科教育学	倫理学「東洋・西洋」(四)	—
	哲学科倫理学	教育史（一）	教育史（一）
	哲学科社会学	倫理学（三），心理学（二），民族心理学（一），教育史（一）	教育史（一）
日本史及東洋史	史学科国史学	教育学（一），教育史（一）	教育学（一），教育史（一）
	史学科東洋史学	教育学（一），教育史（一）	教育学（一），教育史（一）
西洋史	史学科西洋史学	教育学（一），教育史（一）	教育学（一），教育史（一）

表 3.　教育学教育講義題目表（昭和 9～17 年度）
※「文学部講義題目表」(『三田評論』掲載）より抜粋.

学科	講義題目	担任氏名	附記
昭和 9 年度			
教育学	教育学概論（講義）	小林　澄兄	—
	バルト教育学概論に基く知識的陶冶に関する研究		
	Otto Klemm: Pädagogische Psychologie の研究		
教育学史教育史	Weimer: Geschichte der Pädagogik（古代より近世に至るまでの章）（訳読）		
各科教授論	教育測定学並に診断学	岡部彌太郎	
昭和 10 年度			
教育学	バルト「教育学概論」(訳本)	小林　澄兄	代用科目左ノ如シ. 教育学史教育史ヲ教育学ニ，教育行政ヲ　教育学　ニ,
	Lehmann, R.: Die pädagogische Bewegung der Gegenwart.		
	Stern, E.: Jugendpsychologie		
教育学史教育史	デヴィッドソン「世界教育思想史」(訳本)		
教育行政	比較教育制度論	阿部　重孝	

昭和 11 年度			
教育学	教育学概論	小林　澄兄	代用科目左ノ如シ. 教育学史教育史 ヲ　教育学　ニ,
	Moog, W.: Grundfragen der Pädagogik der Gegenwart.		
	Stern, E.: Jugendpsychologie.		
教育学史 教育史	講義		
各科教授論	教育的測定及び診断	岡部彌太郎	
昭和 12 年度			
教育学	講義	小林　澄兄	代用科目左ノ如シ. 教育学史教育史 ヲ　教育学　ニ,
	O. Tumlirz: Jngendpsychlogie（ママ） der Gegenwart.		
	Kerschensteiner: Grundaxiom des Bildungsprozesses.		
教育学史 教育史	講義		
教育行政	比較教育制度論	阿部　重孝	
昭和 13 年度			
教育学	教育学概論（講義）	小林　澄兄	代用科目左ノ如シ. 教育学史　ヲ　教育学　ニ,
	特殊研究　O. Tumlirz: Jngendpsychologie der Gegenwart.		
	演習　W. Kuhn: Der Arbeitsbegriff der Pädagogie.（ママ）		
教育学史	デヴィッドソン世界教育思想史		
各科教授論	特に国語，外国語，歴史，地理の教授及学習に就いて	岡部彌太郎	
昭和 14 年度			
教育学	教育学概論	小林　澄兄	—
	教育哲学（特殊）		
	労作教育（演習）		
教育史	西洋教育史概論		

昭和 15 年度			
教育学	教育学概論	小林　澄兄	代用科目左ノ如シ 教育行政 ヲ教育学ニ
	教育学演習		
教育学史	教育学史（近世欧洲教育学史）		
各科教授論	各科教授論		
教育史	日本教育史（特殊） 近代日本教育主潮（講義）	中山　一義	教育学史 ヲ教育学ニ 日本教育史 ヲ教育学ニ 〔但シ史学専攻ニ限ル〕
教育行政	一，本邦教育行政の沿革 二，明治維新以後の教育行政の発達 三，現行教育制度 四，教育改革の動向	武部　欽一	
昭和 16 年度			
教育学	一，教育学概論	小林　澄兄	代用科目左ノ如シ 一，教育史　ヲ教育学ニ（但シ史学専攻ニ限ル）
	一，G. Kerschensteiner: Das Grundaxiom des Bildungsprozesses.（特殊）		
	一，著名著書並に論文研究（演習）		
教育史	近世欧洲教育史		
昭和 17 年度			
教育学	一，教育学概論	小林　澄兄	代用科目左ノ如シ 一，教育学史，教育行政 各科教授論 ヲ教育学ニ 一，目本教育史（ママ）ヲ教育学ニ（但シ史学専攻ニ限ル）
	一，諸論文の研究（演習）		
教育学史	一，西洋労作教育思想を中心として		
各科教授論	一，各科教授法（法規を中心として）		
教育史	近代日本教育政策の主要問題	中山　一義	
教育行政	一，総論 一，我が国に於ける教育行政の沿革 一，現行教育制度 一，教育改革論	武部　欽一	

表 4.　学科目別にみる教育学教育講義題目表（昭和 9～17 年度）
※「文学部講義題目表」（『三田評論』掲載）より抜粋.

a.　教育学

	講義題目	担任氏名
昭和 9 年度	教育学概論（講義） バルト教育学概論に基く知識的陶冶に関する研究 Otto Klemm: Pädagogische Psychologie の研究	小林　澄兄
昭和 10 年度	バルト「教育学概論」（訳本） Lehmann, R.: Die pädagogische Bewegung der Gegenwart. Stern, E.: Jugendpsychologie	小林　澄兄
昭和 11 年度	教育学概論 Moog, W.: Grundfragen der Pädagogik der Gegenwart. Stern, E.: Jugendpsychologie.	小林　澄兄
昭和 12 年度	講義 O. Tumlirz: Jngendpsychlogie（ママ）der Gegenwart. Kerschensteiner: Grundaxiom des Bildungsprozesses.	小林　澄兄
昭和 13 年度	教育学概論（講義） 特殊研究　O. Tumlirz: Jngendpsychologie der Gegenwart. 演習　W. Kuhn: Der Arbeitsbegriff der Pädagogie.（ママ）	小林　澄兄
昭和 14 年度	教育学概論 教育哲学（特殊） 労作教育（演習）	小林　澄兄
昭和 15 年度	教育学概論 教育学演習	小林　澄兄
昭和 16 年度	一，教育学概論 一，G. Kerschensteiner: Das Grundaxiom des Bildungsprozesses.（特殊） 一，著名著書並に論文研究（演習）	小林　澄兄
昭和 17 年度	一，教育学概論 一，諸論文の研究（演習）	小林　澄兄

b.　教育学史

	講義題目	担任氏名
昭和 9 年度	【教育史と共通】 Weimer: Geschichte der Pädagogik （古代より近世に至るまでの章）（訳読）	小林　澄兄
昭和 10 年度	【教育史と共通】デヴィッドソン「世界教育思想史」（訳本）	小林　澄兄
昭和 11 年度	【教育史と共通】講義	小林　澄兄
昭和 12 年度	【教育史と共通】講義	小林　澄兄
昭和 13 年度	デヴィッドソン「世界教育思想史」	小林　澄兄
昭和 14 年度	—	—
昭和 15 年度	教育学史（近世欧洲教育学史）	小林　澄兄
昭和 16 年度	—	—
昭和 17 年度	一，西洋労作教育思想を中心として	小林　澄兄

c.　教育史

	講義題目	担任氏名
昭和 9 年度	【教育学史と共通】Weimer: Geschichte der Pädagogik（古代より近世に至るまでの章）（訳読）	小林　澄兄
昭和 10 年度	【教育学史と共通】デヴィッドソン 「世界教育思想史」（訳本）	小林　澄兄
昭和 11 年度	【教育学史と共通】講義	小林　澄兄
昭和 12 年度	【教育学史と共通】講義	小林　澄兄
昭和 13 年度	—	—
昭和 14 年度	西洋教育史概論	小林　澄兄
昭和 15 年度	日本教育史（特殊）近代日本教育主潮（講義）	中山　一義
昭和 16 年度	近世欧洲教育史	小林　澄兄
昭和 17 年度	近代日本教育政策の主要問題	中山　一義

d.　各科教授論

	講義題目	担任氏名
昭和 9 年度	教育測定学並に診断学	岡部彌太郎
昭和 10 年度	—	—
昭和 11 年度	教育的測定及び診断	岡部彌太郎
昭和 12 年度	—	—
昭和 13 年度	特に国語，外国語，歴史，地理の教授及学習に就いて	岡部彌太郎
昭和 14 年度	—	—
昭和 15 年度	各科教授論	小林　澄兄
昭和 16 年度	—	—
昭和 17 年度	一，各科教授法（法規を中心として）	小林　澄兄

e.　教育行政

	講義題目	担任氏名
昭和 9 年度	—	—
昭和 10 年度	比較教育制度論	阿部　重孝
昭和 11 年度	—	—
昭和 12 年度	比較教育制度論	阿部　重孝
昭和 13 年度	—	—
昭和 14 年度	—	—
昭和 15 年度	一，本邦教育行政の沿革 二，明治維新以後の教育行政の発達 三，現行教育制度 四，教育改革の動向	武部　欽一
昭和 16 年度	—	—
昭和 17 年度	一，総論 一，我が国に於ける教育行政の沿革 一，現行教育制度 一，教育改革論	武部　欽一

は，小林澄兄[9]が中心となって担当していることがわかる．また，1938（昭和 13）年度までは，「各科教授論」を岡部彌太郎[10]が，「教育行政」を阿部重孝[11]が，年度毎に交互に開講していた．しかし，1939（昭和 14）年度以降は，「教育史」を中山一義[12]が，「教育行政」を武部欽一[13]が，年度置きに担当している．担当者の分担に伴い，一まとめに開講されていた「教育学史」と「教育史」も分離されることとなる．教材には，Otto Klemm “Pädagogische Psychologie,” Hermann Weimer “Geschichte der Pädagogik,” Rudolf Lehmann “Die pädagogische Bewegung der Gegenwart,” Erich Stern “Jugendpsychologie,” Willy Moog “Grundfragen der Pädagogik der Gegenwart,” Otto Tumlirz “Jugendpsychologie der Gegenwart,” Georg Kerschensteiner “Das Grundaxiom des Bildungsprozesses und seine Folgerungen für die Sc hulorganisation, Willy Kuhn “Der Arbeitsbegriff der Pädagogik 等が採用されていることがわかる．Thomas Davidson “A history of education” の翻訳書には，小林澄兄訳『世界教育思想史』（金港堂書籍，1922 年）が用いられたと推測される．

その後，1942（昭和 17）年度からは『三田評論』が休刊となり[14]，詳細な講義題目の連載は途切れてしまっている．それまでほとんど変更されることのなかった[15] 1938（昭和 13）年制定の学則だが，1943（昭和 18）年 1 月公布の勅令第 40 号では大学令そのものが改正され，それに伴い同年 5 月には，慶應義塾大学臨時学則が実施された．こうして，修業年限の短縮を経て，やがて終戦を迎えることとなる[16]．

---

1 慶應義塾『慶應義塾百年史』中巻（後），1964 年，441 頁．
2 同上．
3 同上，441–442 頁．
4 同上，442–445 頁．
5 学則第 13 条に，「各学科目一単位の授業時数は一学年毎週二時間とす」とある．また，第 15 条には，「三学年以上在学し選択学科目を合せて二十五単位を修了

し，且つ卒業試験に合格したる者を卒業とす」と定められている．（同上，446頁）

[6] 公民科が新たに加えられているものの，教育学教育に関する学修科目は挙げられていない．（同上，50頁参照）

[7] 同上，455–457頁．

[8] 『三田評論』第443–537号に連載（昭和9年度：443号，37–39頁，昭和10年度：454号，38–40頁，昭和11年度：466号，40–42頁，昭和12年度：479号，52–54頁，昭和13年度：491号，52–54頁，昭和14年度：506号，52–54頁，昭和15年度：516号，40–42頁，昭和16年度：527号，46–48頁，昭和17年度：537号，26–28頁）．第443号の編集余瀝には，「『文学部講義題目表』は，予て読者諸君からの希望もあつたので，掲載することにした」と記されている．（『三田評論』第443号，1934年，86頁）

[9] 小林澄兄(1886–1971)：　長野県生まれ．1910（明治43）年に慶應義塾文学科を卒業し，義塾普通部教員となる．1914（大正3）年から1917（大正6）年にかけて，慶應義塾留学生として教育学および英語研究のために欧米へ留学．帰国後は幼稚舎，普通部，大学予科主任を歴任し，1934（昭和9）年に文学博士の学位を受ける．1939（昭和14）年に文学部長に就任するが，1946（昭和21）年に公職追放のため辞任．1952（昭和27）年には，公職追放令が解除され慶應義塾に復職．義塾大学名誉教授となり，講師として教壇に立った．労作教育を主唱し，多くの編著書を遺している．（慶應義塾『慶應義塾百年史』別巻，1962年，109頁）

[10] 岡部彌太郎(1894–1967)：　長野県生まれ．1919（大正8）年に東京帝国大学文学部哲学科心理学専攻を卒業．東大で助手をする傍ら，慶應義塾大学，女子英学塾，立教大学等の講師を担当．1930（昭和5）年に立大教授，1935（昭和10）年に東大助教授，1948（昭和23）年教授に就任．1951（昭和26）年に，教育的社会学的心理的検査研究のためにアメリカを視察．日本における教育心理学研究の草分け的存在，そして，幼児教育における先駆的存在の一人．1955（昭和30）年に定年退職し，その後は国際基督教大学教養学部，上智大学文学各教授を歴任した．（下中邦彦編『日本人名大事典　現代』平凡社，1979年，165頁）

[11] 阿部重孝(1890–1939)：　新潟県生まれ．1913（大正2）年，東京帝国大学文科大学教育学専攻を卒業．同大学副手，文部省普通学務局勤務を経て，1919（大正8）年東大助教授に．1923（大正12）年には，サンフランシスコで開かれた万国教育会議に出席．一年間滞在し，教育行財政の実証的研究を学んだ．1934（昭和9）年，教授に就任．当時日本の教育学の主流をなしていた思弁的教育学を批判し，「教育研究とは，教育という事実を問題にし，教育改革の基礎を担うべきだ」と主張．実証的統計的研究を基盤とした教育学研究を目指した．（前掲，『日本人名大事典　現代』，24頁）

[12] 中山一義(1908–1987)：　教育史家，日本教育史学会長，慶應義塾大学文学部教授．東京浅草生まれ．1921（大正10）年に慶應義塾普通部に入学し，大学予科，大学文学部哲学科と進学し，1932（昭和7）年に卒業．同年普通部助手を

務め，翌年に普通部教員，1946（昭和 21）年に普通部主事に．1947（昭和 22）年には，大学文学部講師を兼任し，1955（昭和 30）年に文学部教授．翌年には幼稚舎長を兼務し，1960（昭和 35）年まで在任した．道元，世阿弥等の中世修道論と，福澤諭吉および慶應義塾を研究．『慶應義塾百年史』編纂に参画し，分担執筆や共同研究に大きな貢献をした．（前掲，『慶應義塾史事典』，710 頁）

[13] 武部欽一 (1881–1955)：　石川県生まれ．1908（明治 41）年に東京帝国大学法科法律学科を卒業．翌 1909（明治 42）年には山口県事務官，1911（明治 44）年には文部省参事官，宗教局長，実業学務局長，普通学務局長，資源局参与，大礼使事務官，朝鮮総督府学務局長，文部省普通学長等を次々と歴任した．1934（昭和 9）年に広島文理科大学長兼教授に任じられたものの，赴任しないまま辞任．その後は，大日本青年館理事，帝国教育会専務理事，社会教育協会理事，共立女子学園理事を務める傍ら，慶應義塾大学文学部，東大文学部の各講師を兼務していた．（前掲，『日本人名大事典　現代』，462 頁）なお，慶應義塾の教育学専攻での講師は，1944（昭和 19）年に辞任しており，在職期間は 4 年 6 ヶ月であった．（前掲，『慶應義塾百年史』別巻，123–124 頁）

[14] 大戦の影響は『三田評論』にも及び，1943（昭和 18）年 12 月より休刊し，1951（昭和 26）年に復刊するまで約 8 年もの歳月を要した．なお，復刊は果たしたものの，1960（昭和 35）年までは年に 3〜6 回不定期に刊行されるに止まり，1961（昭和 36）年にようやく月刊に戻すことができた．（慶應義塾『慶應義塾史事典』（慶應義塾 150 年史資料集　別巻 1），2008 年，58–60 頁．）

[15] 前掲，『慶應義塾百年史』中巻（後），800–801 頁．

[16] 本稿では割愛したが，前掲書『慶應義塾百年史』別巻には，当時の状況が以下のように記されている．「在学年限の短縮が行なわれ（昭和 17 年 6 月），さらに昭和 19 年 4 月より，文学部学生の定員が 40 名に減少され，健康な学生の大部分が学徒出陣により軍務につき，残留学生のほとんどがこれまた勤労動員により，軍需工場等に宿泊して作業するといった事情になったため，三田における授業は満足に行ない得ず，まして勤労動員先における授業も，引率または監督として同行した教員が，学年，専攻の別なく，僅かの時間を利用して講義せざるを得ないといった状況になった．」（123 頁）戦時下における動向の詳細については，前掲『慶應義塾百年史』中巻（後）の「第五章　戦時体制と戦後の処理」や，白井厚・浅羽久美子・翠川紀子編『証言　太平洋戦争下の慶應義塾』（慶應義塾大学出版会，2003 年）等を参照されたい．